

学生活動サポート助成金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を発展させる活動・研究（キャリアデザイン学部の学生が代表者となる団体が行うものに限る）について、その費用の一部に対して助成を行う制度である。対象となる活動の条件は、以下の通りである（2025年度学生活動サポート助成実施要項より）。

- (1) 学生主体の活動であること
- (2) 法政大学キャリアデザイン学部の外部にある個人や団体等と協働・連携し、社会に貢献する社会的活動であること
- (3) 活動の受益者が活動の当事者（団体）に限定されていないこと
- (4) 活動の成果を広く社会に公開できるものであること

以下のページでは、2025年度に助成を受けた各団体の実績報告書を掲載しているので、ご参照いただきたい。本プログラムの助成金は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されたものである。同学会の運営にご協力いただいている全ての方々に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

(学生サポート委員長 仲田康一)

法政国際高校における制服意識に関する調査・分析

—1980～90年代の先行研究を踏まえて—

23M1315・小林月琴

1 連携した学外の個人・団体名

法政大学国際高等学校

2 実施概要

(1) 目的・概要

現在の日本の高校では、学校の校則により生徒の服装がある程度制限されている場合が多い。しかし、服装の自由が保障されている高校においても、生徒の多くが「制服」や「制服風の私服」を選択している現象が見られる。本研究では、春学期の質問紙調査、先行研究分析に加えて、秋学期に実施したインタビュー調査の分析を行い、制服の規定がない法政大学国際高等学校における生徒の服装選択について考察することを目的とした。

また、高大連携型の調査活動を通じて、高校生は大学での学びに対する関心を高め、大学生は講義での学びを実践へとつなげる経験を得るなど、相互の学びの機会となる点に本企画の重要な意義がある。

(2) 準備

①法政大学国際高等学校について

法政大学国際高等学校は、神奈川県横浜市鶴見区に所在する法政大学の附属高校である。前身は1889年創立の潤光学園であり、1949年に法政大学の附属女子校として再編された。その後、2004年に服装規定が改訂され、服装が自由化された。2018年に共学校化とともに現在の「法政大学国際高等学

校」に改称された。

「日常生活の諸注意」は最低限のため、服装に関しては「学習に適した身だしなみ」が求められるものの、具体的な制服の規定はなく、生徒は自由に服装を選択できる。ただし、女子に関しては旧・法政女子高の制服（通称：式服）があり、女子の服装選択の一つとして今もなお残っている。

②先行研究分析

若者と制服に関する複数の文献のなかから、とくに以下の2つの文献を集中的に読み込んだ。

a) 宮崎あゆみ (1993) 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィーをもとに—」

生徒たちが学校・学級内で準拠する独自の価値観を形成し行動様式を編み出していく特定の集団を「サブカルチャー」と呼ぶ。「ジェンダー」の視点を取り入れて「アカデミックアチーブメント」や「階級」に「ジェンダー」の視点を取り入れサブカルチャーをとらえなおす研究を「ジェンダー・サブカルチャー」と呼ぶ。この研究ではジェンダー・サブカルチャーによって制服の着方、もしくは着崩し方に変化が生じているのかを多くが進学するTコース、就職又は専門学校に進むAコースがある女子高において半年間の参与観察、インタビュー調査を行ったものである。

b) 山口晶子 (2007) 「若者文化としての

制服—女子高校生の制服おしゃれに着目して」

戦後から現在に至るまでの女子高校生の変遷を見直し、現在における制服の価値づけを再確認するとともに、既にある程度の定着が見られる、女子高校生の制服スタイル、制服おしゃれに着目し、その持つ意味について考察している。表1は、論文内の表を一部省略して作成したものである。

区分	第1期	第2期	第3期 (モデルチェンジブーム期) (女子高校生ブーム期)	ポスト第3期
年	戦後~70年代前半	70年代後半~80年代	88年以降	現在
学校	学校制度の整備	校内暴力対策	多様化	学校五日制
文化的側面	学校文化	反学校文化	若者文化化	若者文化
制服の作用	統一	個性	差異化	全体的同化/個人的異化

表1 学校制服の変遷 戦後~現在

(3) 実施期日・内容

以下に述べる2種の調査を行った。加えて、春学期には高校を訪問し、1年生の授業に複数回参加したり、我々の活動内容の説明をしたりする機会を持った。秋学期には量的調査結果のパンフレットを配布して、高校生に調査結果を報告する機会を複数回持った。そして、調査内容に関心を持った生徒のなかから、インタビュー調査の参加者を募集した。

①質問紙調査

2025年5月28日(水)、30日(金)、6月2日(月)の3日間にわたり、法政大学国際高等学校の1年生8クラス(公共の授業履修者、約300名)を対象に質問紙調査を実施した。最終的に260名(女性200名、男性50名、回答しない9名、無回答1名)から回答を得た。調査はGoogleフォームを用い、任意回答方式とした。

【主な質問内容】

- ・学校の服装(式服、ジャージ、制服風の私

服、それ以外の私服)

- ・どのように服装を決めているか
- ・中学生時代の制服の着方
- ・SNS利用(制服コーデの影響を受けたか)

②インタビュー調査

法政大学国際高等学校1年生を対象に、フォーカス・グループインタビューを実施した。調査は2回に分けて行い、2025年12月1日(月)にAグループは女子生徒3名、Bグループは女子生徒4名を対象として、それぞれ約1時間のインタビューを行った。参加者はいずれも立候補制で募集した。両グループとも、インタビュアー2名による半構造化・形式的なシングルインタビュー形式で実施した。

【主な質問内容】

- ・制服のイメージ
- ・制服のない高校を選んだ理由
- ・「なんちゃって制服」について(着ているかどうか、定義、武服との違い、等)
- ・着崩しについて
- ・法政国際高等学校を選んだ理由
- ・JKブランドについて

(4) 従事者

キャリアデザイン学部、発達教育領域の寺崎里水ゼミ所属の高校班の3年生を中心に行った。

3 結果・意義・所見

(1) 分析結果

本研究では、制服の規定が存在しない法政大学国際高等学校と連携をして生徒の服装選択の実態とその意味について、質問紙調査、先行研究の整理、インタビュー調査をもとに分析を行った。

分析の結果、制服が自由であるにもかかわらず

わらず生徒たちは私服のみを選択しているのではなく、式服、なんちゃって制服、私服を状況や目的に応じて使い分けていることが明らかになった。式服は学校ならではの特別感や非日常性を演出する服装として位置づけられ、集団で共有される象徴的な服装として機能していた。なんちゃって制服は、実用性とファッション性を兼ね備えた存在として写真撮影や他校の学祭参加など「高校生らしさ」を意識する場面で選択されていた。一方、私服は日常的で機能性を重視した服装として学校生活を過ごしやすくするための手段として選ばれていた。

また、インタビュー調査からは「JKブランド」という言葉自体を自分に直接当てはめて認識していない生徒であっても「高校生という時期が特別である」という意識を持っていることが読み取れた。SNS上に存在する理想化された高校生像と自分たちの日常との間に距離を感じつつも、そのイメージに近づくための手段としてなんちゃって制服を選択している様子が見られた。

以上より、服装が自由な高校における服装選択は「自由だから私服になる」という単純な構図ではなく、高校生という立場や友人関係、場面ごとの意味づけを反映した実践であることが明らかになった。生徒たちは複数の服装を使い分けることで高校生活を円滑に送りながら自身の立ち位置や高

校生らしさを調整しているといえる。服装は規則の有無だけで規定されるものではなく、高校生文化やジェンダー、同調と差異化のバランスの中で意味づけられる重要な要素である。

(2) 高大連携活動

高校生と大学生が協働して進める高大連携型の調査活動を通じて、高校生が大学での学びの姿を具体的に知ることができるといふ教育的効果も得られた。大学生にとっても現場での調査活動は講義での学びを実践と結びつける貴重な経験となり、相互に学びを深める機会となった。

また、大学生は質問紙調査やパンフレット配布、インタビュー調査などの活動を通じて、自分や他者の服装にあらためて関心を払うようになった。また、自身の中学時代から現在に至る服装選択を振り返り、その意味を捉え直す契機となった。

なお、調査によって、高校生にとって制服を含めた服装選択やその意味は「高校生文化やジェンダー、同調と差異化のバランスの中で意味づけられる」ということが明らかになった。この点について、今後、高校での調査報告の機会を得て、高校生自身の考えなども取り入れながら、さらに分析を深める予定である。

富山県の私立高校におけるキャリアサポートプログラム

—大学での研究意欲を高めるためのプログラム—

23M0119 長谷川侑香

【1】連携した学外の個人・団体名

学校法人 荒井学園 高岡向陵高等学校

【2】実施概要

(1) 企画実施の背景

富山県の私立高岡向陵高等学校（以下、向陵高校）は、以前からプロジェクトチームの先輩方との交流があり、紹介を受けた高校である。

向陵高校とは昨年度もオンラインを含め複数回の交流会を実施している。昨年度の時点では、今後の大学での研究意欲を高めるために、自分の好きなことに関する探究を行うことが計画されていた。そしてその研究への理解度を深めることに繋がる学習として今年度の3月に向陵高校にて高校生に対して自己分析ワークを行った。その発展として我々は今年度から、研究を行う総合の時間のサポートとして交流をさせていただくことになった。

そして今後の自分たちのキャリアを形成していくことや、他者のキャリア支援を行っていくうえで、富山という東京近郊とは全く別の環境で暮らす高校生たちとの間に関係をつくり、地方でのキャリア形成について理解を深めることは貴重な経験だと考え、そのこと以上に、自分たちが富山の高校生たちの視野を広げ、手助けをしたいと考えたため、本プロジェクトを行うことを決めた。

向陵高校の先生方からも交流を行ってもよいという許可を頂いたため、以前より交

流を続けてきた先輩方から助言を頂きつつ、高校生に対するキャリアサポートプログラムを企画・実施することになった。

私たちは向陵高校の生徒たちに対して、大学生活や探究活動についての具体的なイメージを持ってもらうことを目的に、本プロジェクトを実施することとした。そして今回の交流では今年度から始まる総合の時間のサポートとして、探究活動における問いの設定を手助けすることを考えた。高校生が自分の興味関心のあることや気になることをリストアップし、そこから探究活動における問いの設定を行うことを予定とした。またその中で高校生にとって自分で問いを設定することは難しいと判断したため、大学生がサポートに入ることでよりスムーズに探究活動が進むと考えた。そのために今回の交流では探究テーマの問いの設定の説明を行い、次に大学生と高校生数名で行うグループワーク形式で問いの設定ワークを企画した。

(2) 事前準備

私たちは富山県の高校生との対面交流が距離の関係で回数の限られたものになることを見据えたうえで、オンライン交流やメールでのやり取りを取り入れた形の交流を計画した。本プロジェクトのメインである高校生との交流の時間をより多く確保するために、向陵高校の先生方との情報交換を積極的に行うことや、事前資料の作成や事前リハーサルを徹底的に行うことで当日の活動の最適化を図った。

(3) 実施期日

2024年11月15日(金) オンラインで交流会

2025年2月9日(日) オンラインで打ち合わせ

2025年3月13日(木) 対面

2025年5月1日(木) オンラインで交流

2025年5月16日(金) 対面

(4) 企画従事者

中澤颯人、高橋陽香、河村祐太郎、小松崎

万純、長谷川侑香、

計5名

(5) 企画内容

1 企画概要

今回のプロジェクトでは高校1年生7名の女子生徒と交流した。今後の実践的な探究活動のサポートとして、探究活動の重要なポイントとなる「問いの設定」についての理解を深め、生徒自身の問いを見出すことを目的とした企画を行った。具体的に高校生の総合的な探究の時間を2時間分いただいて、我々が授業構成を考えて実際に授業を行った。グループワークセッション形式を用いて生徒1人1人との対話を重視した活動を行った。

5月16日の対面交流では、高校生の総合的な探究の時間を2時間分いただいて、我々が授業構成を考えて実際に授業を行った。

2 問いの設定の仕方について

事前にオンライン上で探究テーマを決める前段階のサポートを行った際に、「問いの設定の仕方」について説明してほしいという要望があった。そこで、実際に高校の総合の時間で使用している

資料を共有していただき、その資料に基づきスライドを作成した。高校生たちに問いの設定に対する解像度を高めてもらうために、説明をするだけでなく、具体的な「問い」を用いた説明を行った。さらに、「問い

の設定ワークシート」に即した概要のスライドを作成・投影したことによって、大学生のサポートを補助し、円滑なグループワークの進行を図った。

3 グループワーク

探究テーマの問いの設定に関する説明の後にグループワークを行った。生徒の進捗状況に合わせて、3つのグループに分かれ活動を進めた。その上で一体一形式ではなくグループワーク形式にすることによって、意見の偏りを減らすという工夫を行った。実際のグループワークでは、ワークシートを使い各生徒ごとに進めていった。ワークシートでは、①探究領域、②探究テーマ、③探究の問い、④調査方法、⑤調査のゴールの五項目を設定した。最初は生徒ごとに進捗が違ったが、後に全員が⑤の調査のゴールまで進めることができた。その後、グループワークで生徒たちの探究テーマの確定、探究していく上での調査方法の模索、調査のゴールを共に考えた。

最後に今回の授業についての感想や評価をgoogleフォームのアンケートで答えてもらった。

4 結果・意義・所見

本活動の意義は、富山県の高校生に対して、大学生になってからの研究意欲を高めてもらうことである。また、都内の大学生の私たちが富山県の高校生達と交流することによって、高校生の視野を広げることである。以下では、本企画を実施した結果と社会的意義、今後の活動に向けての振り返りについて詳しく述べていく。

私たちは今回、高校生と2回目の対面交流を行った。1回目の対面交流を含み、オンライン交流も行った後での対面交流であったため、緊張感がほぐれた状態での対面交流となった。高校生が興味関心のある

分野ごとに班で分かれて活動を行い、問いの設定を私たち大学生と共に行った。

担任の榎田先生からは、今までの個人ワークの進みがあまり順調でないとの話を伺っていたが、私達との共同による作業によって高校生それぞれの興味のある領域から問いの設定まで、円滑に進めることができた。また、私達自身も一回目の交流を経たことによって高校生に対して適切なアプローチ方法を行えるようになり、よりオープンな交流を実施することができた。そして、目標としていた高校生全員のワークシートを埋めることも達成でき学習としての進捗も満足のいくものとなった。

(6) その他：東京交流

夏季休暇期間中に、教員1名および生徒3名を対象とした東京交流を実施した。新大久保にて生徒の希望箇所を大学生が案内した後、法政大学キャンパス内にて親睦を深めるためのレクリエーションを行った。さらに、遠藤野ゆり教授による特別授業が実施され、高校生が大学での学びに触れる機会を設けた。

1 事前準備

高校生にとって貴重な来京機会であることを踏まえ、大学への関心を高めるための行程を計画した。本活動の主旨に基づき、大学生活への具体像を把握してもらうため、学内探索を取り入れたレクリエーションを考案した。また、大学生と生徒がグループごとに密なコミュニケーションを図れる場を設け、相互理解を深める準備を整えた。

2 結果・意義・知見

東京交流においては、直接的な探究学習は行わなかったものの、対面による交流を通じて生徒との信頼関係を深めることができ、教育的支援を行う上での基盤を築く機

会となった。この交流で得られた関係性は、その後のオンライン支援を円滑に進める上での重要な足掛かりとなった。今後は、構築した関係を維持しつつ、継続的な活動を展開していく。

【3】その後の活動

東京交流後、何度かオンライン上で調査データ提供や助言を行った。その後研究をまとめ、二月頭にとやま研究フォーラムにて高校生は発表を行うことが出来た。

【4】まとめ

本活動では、対面とオンラインを併用した継続的な支援により、遠隔地における多角的なコミュニケーションの有効性を実証した。当初の課題であった対面不足や問いの設定の難しさも、双方の特性を活かした補完的体制と事前リハーサルによる資料改善で克服し、生徒全員を学外発表まで導くことができた。今後はこの体制を次の代へ継承し、高岡向陵高校への適切にサポートを継続していく。

地方にある未来

—士別で見つけるキャリアと居場所—

23M0619・橋本ゆかり

1 連携した学外の個人・団体名

地域拠点：北海道士別市ゲストハウス E

インタビューー

小林さん：Iターン、地域おこし協力隊、20代

佐藤さん：Uターン、地域おこし協力隊、20代

渡辺さん：Uターン、ゲストハウス運営、30代

高橋さん：Iターン、木材会社勤務、20代

※個人情報保護の観点から、すべて仮名である。

2 実施概要

本企画では、北海道士別市をフィールドとし、地域づくりや地域産業に携わる人々の取り組みを通して、地方社会におけるキャリア形成の実態とその多様性について実証的に理解を深めることを目的とする。

少子高齢化や都市部への人口集中が進行する現代において、地方社会は持続可能性の観点から多くの課題に直面している。こうした環境下において、農山村を自己実現や課題解決にチャレンジできる場として捉える若い世代が存在している。本企画では、その中でも、Iターン・Uターンなど都市からの移住経験を持つ人々や、地域に根ざして活動する女性のキャリア形成に着目し、インタビュー調査を通じて、地域で暮らす・働くという選択の背景や意義について考察する。

(1) 調査計画と準備 (4月～7月)

半構造化インタビューを計画し、分析視

点を以下の3点に設定して質問項目の検討を行った。

①地域との関わり方の変化

②人との関係性・支援のあり方

③キャリア意識や生き方の変化

また、調査対象者を探し、連絡、日程調整、録音機材の準備、逐語化フォーマットの作成を行い、インタビュー実施に向けた体制を整えた。

対象者の中には過去に Web 媒体などで記事になっていたり、自治体メディアで紹介されたりした人がおり、そういう人については入手できる限りの情報を事前に調べた。

(2) インタビュー実施 (7月29日～31日)

インタビューは2025年7月29日～7月31日の3日間にわたり、士別市内にて対面形式で実施した。直前に連絡がつかなかった対象予定者がおり、最終的にインタビューーは4名となった(1に記載)。所要時間はインタビューー1名あたりおよそ90分、インタビュアー1名と記録1名の2人体制で行い、許可を得た上で音声を録音した。

調査従事者は、森晴香、橋本ゆかり、王霽月、阿部礼佳の4名である。



写真1:インタビューの様子1(許可を得て掲載)

(3) 分析 (8月～12月)

インタビュー後、各自で録音データを逐語化し、インタビュー実施に取ったメモを見ながら修正し、テキストデータを作成した。これをインタビューーに送り、内容の確認・修正をしてもらい、データとしての使用許可をあらためて得た。これをデータベースとして分析に用いた。

分析にあたって、まず、語りの流れを整理するためにシークエンス分析を行った。さらに、4名の語りを比較し、共通して見られた特徴を抽出するためにカテゴリ分析を補助的に用いた。



写真2：インタビューの様子2（許可を得て掲載）

3 結果・意義・所見

(1) 調査結果

調査結果について、分析視点別にまとめる。

①地域との関わり方の変化

インタビューを通して明らかになったのは、4名全員が、当初から明確な目的な役割意識を持って士別市に関わり始めたわけではないという点である。移住や帰郷のきっかけは「避暑」、「仕事」、「一時的な滞在」など、必ずしも地域定着を前提としたものではなかった。

小林さんは、旅の途中で訪れた士別市において人との関わりを通じて居心地の良さ

を感じ、地域おこし協力隊として活動を始めている。

渡辺さんは、士別市を離れた後に多様な職業経験を積んだ上で再び士別市に戻り、ゲストハウスの運営を通じて地域との関係を再構築していった。

佐藤さんはUターン後、ゲストハウスの勤務を経て地域活動に関わるようになり、徐々に地域内での役割を担う存在へと変化している。

高橋さんは就職をきっかけに士別市へ移住しており、当初は仕事を通じた地域との関わりが中心であった。しかし、木育活動や広報業務を通して地域の自然資源や人々と接する中で、地域との関係が生活全体へと広がっていった。

このように、4名はいずれも「一時的な関わり」から「地域の一員としての関わり」へと段階的に変化していることが読み取れた。

②人との関係性・支援のあり方

地域における居場所形成やキャリア形成の背景には、人との関係性が大きく影響していることが明らかになった。特に共通して見られたのは、一方的な支援よりも、日常的な関わりの中で生まれる緩やかな支援が重要な役割を果たしている点である。

小林さんは、士別市を訪れた際に出会った人々との自然な交流を通じて地域への愛着を深め、地域おこし協力隊としての活動へとつながっていった。

佐藤さんや渡辺さんも、ゲストハウスという場を介して多様な人と関わる中で、地域内外の人々からの協力を受けながら活動を広げている様子が見られた。

高橋さんは、職場での人間関係や業務を通じた信頼関係が、地域での生活を支える基盤となっていた。

いずれの事例においても、支援は「与えられるもの」ではなく、相互的な関係の中

で生まれており、人とのつながりそのものが地域における生活を支える重要な要素となっていることが読み取れた。

③キャリア意識や生き方の変化

インタビューを通して、4名のキャリア意識には共通して、「一度立ち止まり、進路や生き方を見直す経験」が含まれていることが読み取れた。大学中退や転職、移住といった選択は、必ずしも計画的なキャリア形成の結果ではなく、学業や仕事への違和感、将来への迷いを抱えながら模索する中で選り取られたものであった。

小林さんは、就職活動を行わず旅を続ける中で、働き方や生活のあり方を重視する価値観を形成していった。

佐藤さんや渡辺さんもまた、進学や就職を経て一度地域を離れた後、経験を重ねる中で「地元で何ができるか」、「地域とどう関わりたいか」を再考するようになっていく。

高橋さんは、研究中心の進路に違和感を抱いたことをきっかけに、実践的に自然と関わる働き方へと志向を転換していた。

地域での生活や活動を通じて、安定した職業やキャリアよりも、自分自身が納得できる役割や働き方を重視する意識が強まっていた点が特徴的である。キャリアを固定的なものとして捉えるのではなく、環境や関係性の中で変化していくものとして捉える視点を育てていると考えられる。

(2) 調査意義

士別市での活動では、キャリア形成において「人との関係性」が中心的役割を果たしていた。都市部では職務内容や実績が重視される一方、地域では「信頼」「役割の積み重ね」「地域への貢献」がキャリアの核となる。4名の語りからは、地域での活動が単なる仕事ではなく、「地域にどう関わり、どのように必要とされるか」を模索する過程

そのものがキャリア形成につながっていることが明らかになった。

こうした関係性に基づくキャリア観は都市部の競争的モデルとは異なる価値観を提示している。分析過程では、ゼミ生から「自分たちと価値観が大きく異なる」という驚きの声も上がった。調査結果が東京の大学生の進路選択に即時的影響を与えるとは言えないが、キャリア観の幅を広げる契機となり得る。

(3) 総合所見

本調査から、士別市における居場所形成とキャリア形成は、明確な計画ではなく日常的な関わりの積み重ねから生まれることが明らかになった。4名はいずれも「偶然的きっかけ」から地域と関わり始め、生活の中で「地域にとっての自分の役割」を模索しながら関係性を築いていた。

特に、地域における「居場所」と「キャリア」が相互に作用する点は重要である。居場所意識が高まることで役割が広がり、その役割が新たなキャリアの可能性を生む。一方で、活動を通じて関係性が深まることで安心できる居場所が形成される。

士別市のような地方都市には、個人が関わり方を選びやすく、役割が固定化されにくい柔軟性がある。「自分のペースで関わられる」「やりたいことを試しやすい」という感覚は地域社会の包容力を示し、従来の働き方に違和感を抱く若者にとって新たな選択肢となり得る。

また、地域での関係性は相互的で緩やかであり、人口減少が進む地方においてコミュニティ維持の基盤となる。居場所形成は個人のキャリアだけでなく地域社会の再生にも寄与する。本調査は、地域に根ざす居場所が「安心できる空間」以上に、関係性の中で役割を持ち地域とともに生きるプロセスであることを示した。

このプロセスは個人のキャリア形成に新たな視点を与えると同時に、地域で働く・暮らす価値を再考する契機となる。

(4) 今後の展望

本調査は士別市の地域活動者4名の語りをもとに、居場所形成とキャリア形成のプロセスを明らかにしたものである。ただし対象が限定的であるため、地域全体の傾向として一般化するには慎重な検討が必要である。また、今回は個人の語りを中心に分析したが、制度的背景やコミュニティの歴史的文脈など、より広い視点からの検討も今後の課題である。

今後は、住民・移住者・関係人口など多様な立場の人々を対象を広げることで、地域に根ざす居場所の多様性やキャリア形成の可能性をより立体的に捉えられると考えられる。さらに、継続的な追跡調査により、居場所意識や役割の変化が時間の中でどのように推移するのかを明らかにすることも期待される。

また、得られた知見を東京の大学生にどのように伝えるかも課題であり、ゼミ活動の中で効果的な方法を引き続き模索したい。

なお、学歴とキャリア選択の関係については現在研究を継続しているため、本稿では触れていない。

神奈川県インクルーシブ教育実践校におけるキャリア支援

—他者と楽しく関わり合いながら自分に自信を持つワークショップ—

23M0302・上浦瑞美

1 連携した学外の個人・団体名

神奈川県立 霧が丘高等学校

2 実施概要

(1) 企画実施背景及び概要

本企画は神奈川県立霧が丘高等学校(以下、霧が丘高校)の卒業生である多久和がインクルーシブ教育に注力している母校で、大学生として何か関わったり、貢献したりすることができないかと考えたことが発端となって始まった。

本企画では、当該高校において、障害のある、あるいはその傾向のある生徒たちのキャリア支援を目的としてワークショップを実施した。霧が丘高校では共生社会実現を目指したインクルーシブ教育の実践を推進しており、私たちは程度の異なる様々な障害を持つ生徒たち一人ひとりにとって有意義な活動にすべく、取り組んだ。

本企画の趣旨はキャリア支援の対象者である霧が丘高校の生徒たちが個性を活かすことによって、自分に自信を持ったり、楽しく他者と関わったりすることである。当該生徒たちは、これまでの活動より、自信が低い傾向にあることや、他者理解の困難さ、他者との関わりへの不得意さを課題として抱えていることが分かっている。そのような生徒たちがワークショップを通じて、個性の活用からなる成功体験による自信の獲得や、他者と楽しく関わる経験を得られるよう、企画を考案した。加えて、生徒た

ちが自分を理解し、大学生との交流の中で、他者を理解するといった、自己理解と他者理解を目指し、尽力した。また、昨年度同様、当該生徒に加えて、霧が丘高校のボランティア部の部員である生徒たちも活動に参加している。

上記の企画の目的及び趣旨に沿ったワークショップとして、本年度は大型企画として、校内イベント「パフェスティバル」を開催した。これは、霧が丘高校の担当の先生から、昨年度に引き続き、長期間でのイベント計画の提案をいただいたこと、ボランティア部員の参加により、活動規模が拡大したことをもとに、構想された。さらに、霧が丘高校の生徒たちからの要望を踏まえ、生徒自身が準備や接客を行い、主体的に楽しみながら来場者と関わることを目標とした、喫茶店形式で来場者にパフェづくりを体験してもらう「パフェスティバル」に決定した。

(2) 事前準備

霧が丘高校にて本企画を実施するにあたり、事前に高校の担当の先生と適宜メールで連絡を取り、企画の目標や活動計画、具体的な内容や進行スケジュールの共有と説明を行った。

また、参加者募集のためのポスター配布を依頼した。担当の先生からは、企画や大学生への要望を伺い、日程の調整や備品の準備についても対応いただいた。

その他の事前準備として、企画の目標や活動計画の策定、参加者募集のための配布

用のポスター作成を行った。加えて、説明用資料やスライド、調理器具、材料等についても事前に入念に準備を行った。

(3) 準備、実施期日

第1回

準備日：5月上旬より

実施日：5月23日(金)

第2回

準備日：6月上旬より

実施日：7月11日(金)

第3回

準備日：6月下旬より

実施日：7月18日(金)

第4回

準備日：10月下旬より

実施日：11月19日(水)、11月21日(金)

第5回

準備日：11月上旬より

実施日：12月19日(金)

(4) 企画内容

①イベント「パフェスティバル」準備

第1回目は、昨年度に引き続き、校内喫茶店の開催に向けた準備として、宣伝用のロゴが入った看板、装飾の作成を行った。装飾に関しては、生徒の意見を参考に、それぞれ分担して作成し、素敵な装飾が完成した。



写真1 第1回(2025年5月23日)装飾制作

さらに、イベント当日に向けて、パフェ

のトッピングに使用する白玉、ポップコーン、マシュマロの試作を行った。試作にあたっては、それぞれ分担し、作り方の資料を見ながら、役割ごとに作業する姿が見られた。

②イベント「パフェスティバル」リハーサル

第2回目は、接客、調理の練習及び流れの確認を行った。マニュアルの確認と、ロールプレイングを通じて実際の接客の流れを体験できるようにしたほか、高校生らの不安が解消されるように工夫した。また、全体目標と個人目標(当日に頑張りたいこと)を改めて確認し、参加する高校生と大学生がそれぞれ目標意識を持って本番に臨めるよう準備を整えた。

③イベント「パフェスティバル」本番

第3回目は、校内イベント「パフェスティバル」の本番を開催した。霧が丘高校の生徒や保護者、先生方にパフェの材料とドリンクを提供した。

調理においては、来客状況に合わせて臨機応変かつ迅速にメニューを準備する必要があった。一方、接客では、生徒たちが明るく丁寧に対応しつつ、ミスなくオーダーを取れるよう、私たちはアドバイスやサポートに徹した。予想以上の来客があったため、メニュー提供の遅れなどのトラブルも発生した。しかし、生徒をサポートすることで、柔軟に対応した。



写真2 第3回(2025年7月18日)接客フロアの様子

また、当日のうちに生徒たちと振り返りを行い、事前に設定した個人目標が達成できたかどうかを確認し、感想を共有した。これらの経験を今後の生活や活動に活かせるよう、フィードバックを行った。

④顔合わせ zoom

第4回目は、3年生から2年生主体の活動への移行に伴い、挨拶と本企画の宣伝を目的とした顔合わせの zoom を2日間に分けて実施した。自己紹介後の質問コーナーでは、会話が広がり、親睦を深める機会となった。

⑤夏の企画決め

第5回目では、7月のイベントで行う企画を決定した。本イベントは、「企画・実行力」「相互理解」「柔軟性」の向上を目的としている。その目的をもとに、生徒の意見を取り入れた結果、生徒と当プロジェクトメンバーが準備から接客までを協働で行う、来場者体験型の「ロールアイス作り」を実施することとした。主体的に取り組み、来場者と関わることを目標としている。

3 結果・意義・所見

(1) 活動の結果

本活動の結果として、定期的なワークショップの開催を通じて、生徒たちが他者と楽しく関わり合いながら、自信を持つ機会を創出できたと考える。昨年度に引き続き、大型企画として、生徒の要望を踏まえた校内イベントである「パフェスティバル」を開催したこともあり、前年より毎回参加してくれる生徒の人数が増加し、多くの生徒が他の生徒や大学生との交流を楽しみに、意欲的に活動へ参加する姿が見られた。回を重ねるごとに親睦が深まり、活動を通じて自然と交流する様子も多く見受けられた。

また、イベントの開催中は、先生方や保護者、在校生と直接やりとりする機会が多く、最初は緊張した様子の生徒たちも次第に慣れ、笑顔で自信を持って接客ができるようになっていき、楽しみながら他者と関わる様子だった。さらに、来客から直接感謝の言葉が接客を行っている生徒に伝えられる場面も多くあり、生徒たちはやりがいや充実感を感じながら業務に取り組み、自分に自信を持つことに繋がったのではないかと考える。振り返りでは、殆どの生徒が個人目標を達成でき、「楽しかった」、「ぜひまたやりたい」など前向きな声が多く聞かれた。

これらのことから、生徒たちは「パフェスティバル」運営における協力や来客との交流を通じて、他者と楽しく関り合いながら、自己理解と他者理解を促進する機会になったのではないかと考える。

(2) 活動の意義

本活動の意義は、先述の活動の結果の通り、参加生徒が楽しく他者と関わることや自信を持つ機会になるだけでなく、大学生側にとっても通常の大学生活では身に付けられないような経験や知識を得ることができるとも考える。長期間に渡るイベントを開催したことから、スケジュール設定や事前準備などにおいて多くの困難があった。それらを乗り越えることで企画運営のノウハウや知識の獲得、また生徒との関わりを通して、コミュニケーションの方法を実践的に学ぶことができたと考える。

また、生徒一人ひとりがその個性や創造性、良さを活かせるよう企画やその方法を考え、準備するため、多様な背景を持つ人たちとの相互理解や共生を目指した交流の方法についても学ぶことができた。

(3) 今後の活動について

今後の開催予定は、3月、5月、7月である。3月は、「ロールアイス作り」の実現可能性を検証するため、生徒たちと試作を行い、その結果を踏まえて継続の可否や代替案を検討する。また、イベント開催に向けて、

装飾等の準備も進めていく。生徒の意見の積極的取り入れはもちろん、発言しやすい環境づくりやより良い関係性の構築などを意識しながら活動していきたい。

観光行動変容を促すインタラクティブ施策の構築と効果測定

—関係人口創出を目的とした地方観光地の実践研究—

22M1304 恒川望

1 連携した学外の個人・団体名

道の駅多々羅しまなみ公園

大三島みんなのワイナリー

2 実施概要

(1) 企画背景

酒井ゼミでは毎年夏合宿において、地域社会や企業の課題をマーケティングの視点から解決する実践型プロジェクトを行っている。2025年度のプロジェクトにあたり、私たちは「通過型観光からの脱却」をテーマに掲げ、愛媛県今治市大三島に拠点を置く「大三島みんなのワイナリー」との連携を決定した。同社は地域活性化に尽力しており、その活動理念が本ゼミの目指す地域共創と強く合致したためである。

プロジェクトリーダーの恒川望（3年）が中心となり、企業担当者との協議を開始した。オンラインミーティング等を通じた現状把握の結果、しまなみ海道の観光客は特定の島にとどまらず複数の島を巡る傾向が強く、大三島が単なる通過点になっているという課題が共有された。これに対し、私たちはワイナリーを「関係人口の起点」と定義し、観光客と地域の双方向的な接点を作るデジタル施策を提案した。

(2) 課題整理と施策の方針

大三島の観光構造を調査した結果、観光情報の多くは国や県による「しまなみ海道全体」という広い枠組みで提供されており、

大三島独自の魅力やスポット情報にアクセスしにくい現状が明らかになった。そこで本プロジェクトでは、来訪者の潜在的な興味と地域資源を結びつける仕組みが必要であると考え、「観光行動変容を促すインタラクティブ施策」を方針として設定した。

具体的には、ワイナリーの認知拡大と島内スポットの知名度向上を同時に実現する施策として、「あなただけのワイン&観光スポット診断」を構築することとした。これは来訪者がスマートフォンから約1分で回答できる簡単な診断を行い、一人一人の性格に合わせておすすめのコップと大三島の観光スポットを提案するシステムである。さらに、診断で提案されたスポットでの写真撮影を促し、SNSに投稿してくれた方にはワイナリーでのテイスティング無料等の特典を付与するインセンティブ設計を行い、道の駅を「入り口」とした能動的な周遊導線の設計を目指した。

(3) 合宿期間中の活動とシステム構築

2025年8月の夏合宿（2泊3日）に向け、事前に診断ツールの設計および各スポットの素材収集を行った。本プロジェクトの中核となるWebアプリケーションについては、プロジェクトリーダーの恒川望がGitHubを用いて1から独自の診断ツールを構築・開発した。島内の観光資源を「神社関連（大山祇神社、生樹の御門等）」「ミュージアム系（伊東豊雄建築ミュージアム等）」「その他（伯方の塩大三島工場等）」に分類し、アルゴリズムに基づいたパーソナライズ提案

が可能となるようプログラミングを実装した。

合宿期間中は、道の駅多々羅しまなみ公園に特設ブースを設置し、社会実験として診断施策を現地で運用した。現地での実施にあたっては、工藤琴子、桑原瑠花、星野百桃香の3名が中心となり、ブースの飾り付けや、買い物・休憩ついでに立ち寄った観光客に対するQRコードへの声掛け・案内といった運営業務に大きく貢献した。メンバーの積極的な対面コミュニケーションを通じ、診断結果として提示された「島白」や「島口ゼ」といったワインの魅力を直接伝達するなど、デジタルツールと人的な接客を融合させて観光客との深い接点創出に注力した。



図1しまなみ公園での診断スポットブース

<https://nozomu055.github.io/omishima-winery-diagnosis/>
大三島みんなのワイナリー診断 URL
(GitHubにて作成)

3 結果・意義・所見

(1) 結果

本施策の実施期間中、道の駅のブースに

て計57名の観光客が診断ツールを体験し、事後アンケートに回答した。回答者の属性は20代が半数以上(54.4%)を占め、居住地は関東(36.8%)および関西(28.1%)が中心であり、遠方からのドライブ観光客に広くアプローチできたことがわかる。

特筆すべきは、参加者の**82.5%が本イベント参加前に「大三島みんなのワイナリーを知らなかった」**と回答していた点である。しかし、約1分の診断コンテンツを体験した結果、**約86%の参加者がワイナリーについて「理解できた(ある程度～よく理解できたの合計)**」と回答しており、短時間のインタラクティブ施策が認知・理解促進に極めて有効であることが実証された。

また、診断後の行動予定として、「診断で提案された観光ルートを訪れる(14.0%)」、「ワイナリーのワインを試飲する(7.0%)」、「ワイナリーで購入する(5.3%)」といった具体的な行動変容を示す層が一定数(全体の約26%)現れ、通過型観光から島内回遊への誘導という目的に対して確かな手応えを得た。定性的な意見としても、「お酒に一見関係なさそうな質問で、相性の良いワインがわかるのが新鮮だった」「知らない観光地を知れた」といったツールへの高評価に加え、「バスの集合時間が迫る中、とても感じの良い恒川さんにお声がけされ(嬉しかった)」といった対面ならではの人的魅力が記憶に残る体験を創出していた。

a) 意義

本プロジェクトの最大の意義は、事前認知度が1割強に過ぎなかった遠方からの通過型観光客に対し、自作のデジタル技術(診断ツール)と現地での温かい人的交流を掛け合わせることで、短時間で強烈な「認知・共感」を生み出した点にある。これは、関係人口創出の第一段階である「ファン作り」の有効な実証モデルである。また、パーソ

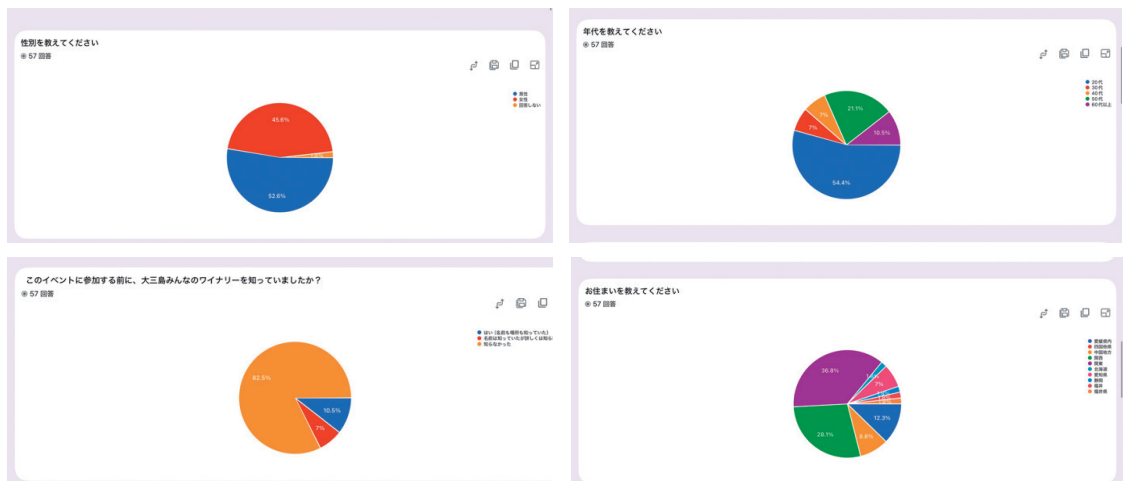
ナライズされた提案によって自発的な観光回遊（14.0%のスポット訪問意向等）を促したことは、大三島の道の駅を単なる休憩所から、島内との「つながりの入り口」へと転換させる大きな可能性を示した。学生がゼロからシステムを開発し、対面での接遇までを一貫して遂行した教育的意義も極めて大きい。

b) 所見

今後の課題として、行動変容のハードルの高さが挙げられる。本施策において約26%が周遊や購買の意欲を示した一方で、

73.7%の参加者は「(診断後に) 特に予定はない」と回答している。これは、立ち寄り当日に急遽旅程を変更することの難しさ（スケジュールの制約等）を表していると考えられる。今後は、来訪者が大三島に到着する前の段階（旅行計画時）でオンライン上から診断ツールにアクセスできる仕組みを構築し、事前に島内回遊のルートとして組み込んでもらう等、「旅前（タビマエ）」から「旅中（タビナカ）」までを一貫してサポートする施策へと進化させることが必要である。

表1 診断ツール解答後のアンケート Google フォーム



学生と地域企業によると共創型イベントを通じた地域内関係構築の試み

—大三島“みんなのワイナリー”体験型展示会プロジェクト—

23B3002・牛尾春和

1 連携した学外の個人・団体名

大三島みんなのワイナリー

2 実施概要

(1) 企画背景

本プロジェクトは、法政大学キャリアデザイン学部酒井ゼミの実践型学習の一環として実施された産学連携プロジェクトである。学生が地域企業の活動や地域社会の現状を理解し、地域課題の解決に向けた施策を企画・実行することを目的としている。本企画では、愛媛県今治市大三島に拠点を置く地域企業「大三島みんなのワイナリー」と連携し、地域住民との関係構築を目的とした体験型展示イベントを企画・実施した。

同社は地域資源を活用した事業を展開し、地域活性化への貢献を目指して活動している。しかし、地域住民との日常的な接点は必ずしも十分とは言えない状況にあり、地域住民の間ではワイナリーの存在は一定程度認知されているものの、設立背景や活動目的、地域への役割については十分に理解されていないという課題があった。こうした状況を踏まえ、本プロジェクトでは「認知から理解への移行」を目的とし、地域住民がワイナリーの活動や理念を身近に感じながら理解できる機会を創出することを目指した。そのため、パネル展示や映像、試飲などを取り入れた体験型展示イベントを企画し、来場者が楽しみながら企業の取り組みや地域との関係性について理解を深め

られる場を提供することとした。

以上のように、本プロジェクトは地域企業・地域住民・大学生という三者の協働によって地域内の関係構築を促進することを目的とした取り組みである。

(2) 企画概要

①イベント実施に向けた準備

本プロジェクトは、2025年春頃からゼミ内で企画検討を開始し、複数回の打ち合わせや教授へのプレゼンテーションを通じて準備が進められた。まず、ワイナリーの現状や課題を把握するため関係者へのヒアリングを行い、ワイナリーが地域社会に果たしている役割や地域住民との関係性について理解を深めた。具体的には、「大三島みんなのワイナリー」の事務局担当である川田祥子氏をはじめとする関係者とミーティングを行い、同社の現状や地域との関係について聞き取りを行った。また、同社代表である建築家の伊東豊雄氏とも都内で面会し、ワイナリー創業の背景や、大三島地域の課題について話を伺った。その後、ヒアリング内容を整理して仮説を立て、イベントのコンセプトや展示内容を検討した。検討にあたっては、①地域住民が参加しやすいこと、②ワインを飲まない人でも楽しめること、③ワイナリーの理念や活動を自然に伝えられること、の三点を重視した。

イベント実施に向けては、展示パネルの制作、体験コンテンツの設計、会場レイアウト、広報方法の検討などを学生主体で進めた。特に、ワイナリーの歴史や取り組み

を来場者に分かりやすく伝える展示資料の作成に多くの時間を割いた。資料制作はチームメンバー4名で分担し、来場者の目を引くデザインとなるよう工夫した。また、地域住民への周知を目的にチラシを作成し、周辺のスーパーやコンビニエンスストアへの掲示、招待状の配布、ポスティングなどを通じて広報活動を行った。さらに、イベント当日に配布するしおりは牛尾が、イベント効果を測定するアンケートは本田・小野寺が作成するなど、メンバー間で役割分担を行いながら準備を進めた。

また、イベント実施日の前日に現地入りし、展示会で上映する島民へのインタビュー動画の撮影も行った。牛尾・芦川チームと小野寺・本田チームの二つに分かれ、事前にアポイントメントを取っていた島民の自宅や事業所を訪問しインタビューを実施した。合計4本の動画を撮影し、その日のうちに編集を行い、翌日の展示会で上映できる形に仕上げた。

以上のように、約4か月にわたる準備を経て多くの成果物を制作し、イベント当日を迎えた。



図1 今回作成した展示会のしおり

②-みんなの展示会-の実施

イベントは、酒井ゼミの夏合宿期間中である2025年8月27日(水)に大三島にて実施された。イベント名は「みんなの展示会」



図2 今回作成した展示パネル4種

であり、会場は大三島みんなのワイナリーの店舗であった。会場では、ワイナリーの活動やワインづくりの想いを紹介する展示コーナーに加え、来場者が体験的に参加できるコンテンツを多数設置した。

展示パネルでは、ワイナリーの設立背景や地域との関係、ブドウ栽培の取り組みなどを写真とともに紹介し、来場者がワイナリーの活動を視覚的に理解できるよう工夫した。また、来場者がワインの魅力を経験できるように試飲の機会も設け、学生がワインづくりに込められた想いや地域資源との関係について説明を行うことで、来場者とワイナリーとの対話が生まれる場となった。

中でも特に反響が大きかったのが、島民へのインタビュー動画の上映である。同じ島に住む島民がワイナリーへの思いや島への思いを語る動画は多くの関心を集め、足を止めて見入る姿が見られた。本イベントでは、来場者に対して参加前と参加後の二時点でアンケートへの回答を依頼し、体験

型展示会を通じてワイナリーへの理解度がどの程度高まったのかを調査した。イベント参加後のアンケートにおいても、インタビュー動画に対する反響は特に大きく、今回の展示会における重要な成果の一つとなった。

以上のように、本イベントは単なる展示にとどまらず、地域住民とワイナリー、そして学生が直接交流する場として機能した。来場者とのコミュニケーションを通じて、ワイナリーに対する関心や地域への思いなど、さまざまな意見や感想を聞くことができた。

3 結果・意義・所見

(1) 本プロジェクトの成果と意義

①本プロジェクトの成果

本プロジェクトでは、大三島みんなのワイナリーに対する来場者の理解度の変化を把握するため、イベント参加前と参加後の二時点でアンケート調査を実施した。調査対象は25組であり、ワイナリーの活動や特徴についてどの程度理解しているかを測定した。その結果、「ワイナリーの活動や特徴を自信をもって説明できるか」という自己評価の項目では、イベント参加前の44.0%から参加後には71.9%へと上昇し、27.9ポイントの向上が確認された。また、イベント参加後の理解度については、95.8%の来場者が「よく理解できた」または「だいたい理解できた」と回答しており、本イベントがワイナリーへの理解を深める機会となったことが示された。展示ブースの満足度を五段階評価で尋ねた結果では、島民へのインタビュー動画と試飲ブースがともに4.43と最も高い評価を得た。また、「今後もイベントや活動に参加したいか」という質問に対しては、すべての回答者が「参加したい」と回答しており、来場者の満足度が

高かったことがうかがえる。

以上の結果から、本イベントは大三島みんなのワイナリーに対する来場者の理解を深めるとともに、今後の活動への関心や参加意欲を高める効果を持っていたと考えられる。

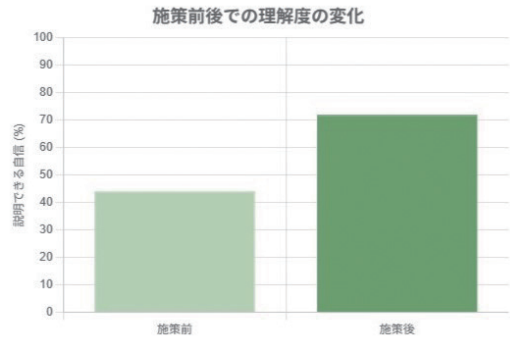


表1 “大三島みんなのワイナリー”に対する理解度の変化(施策前後)

a) 本プロジェクトの意義

本プロジェクトの意義は、大三島みんなのワイナリーに対する地域住民の理解を深め、「認知」から「理解」へと意識を変化させるきっかけを生み出した点にある。イベント実施以前は、ワイナリーの存在を知っている住民は一定数いるものの、その設立背景や活動目的、地域との関わりについては十分に理解されていないという課題があった。

本イベントでは、パネル展示や試飲、島民へのインタビュー動画などの体験型コンテンツを通じて、来場者がワイナリーの取り組みを多面的に理解できる機会を提供した。特に、島民がワイナリーへの思いや地域への考えを語る動画は、来場者にとって身近な視点からワイナリーの活動を捉える機会となり、地域資源としてのワイナリーの価値を再認識する場となった。また、試飲などの体験を伴う展示は、ワインづくりや地域資源への関心を高める効果を持ち、

来場者がワイナリーの活動をより具体的に理解することにつながった。

このように、本イベントは情報を一方的に伝えるだけでなく、来場者が体験を通じてワイナリーの活動を理解する場を創出した点に意義があるといえる。

b) 本プロジェクトを通して得られた学び

本プロジェクトを通じて、地域資源の魅力を伝える際には、単に情報を提示するだけではなく、体験やストーリーを通じて来場者が共感できる仕組みを設けることが重

要であると実感した。特に島民が語るインタビュー動画は来場者からの評価が高く、身近な人々の言葉を通じて地域資源への共感が生まれることが示唆された。また、試飲などの体験型コンテンツと組み合わせることで、ワイナリーの魅力を五感で理解できる展示となった。今回の経験を通じて、地域企業と連携したイベントの企画・運営には、地域の人々との関係性やストーリーテリングの重要性が大きく関わることを学んだ。

メディアを用いたESD教育と異文化交流支援

—SDGs と学習支援の視点から—

23M0512・岩崎泰知

1 連携した学外の個人・団体名

- ・泰日工業大学
- ・いわきユネスコ協会
- ・いわき湯本温泉古滝屋
- ・墨田区えんぴつの会
- ・茨城県立竜ヶ崎第一高等学校・附属中学校
- ・地球対話ラボ

2 実施概要

本報告書では、法政大学坂本ゼミの学生活動サポート助成を通して行った活動の実績について報告する。今年度は、バンコク研修、福島研修、竜ヶ崎第一高校でのESD支援、そして自主夜間中学校墨田区えんぴつの会の学習支援活動の4つのプロジェクトに取り組んだ。以下、各活動について詳細に紹介する。

(1) コンテンツ制作を通じた異文化協働活動と学習支援

①バンコク研修

今年度のバンコク研修は、8月22日から26日までの5日間、タイ王国にて実施した。現地で日本語を学ぶ泰日工業大学の学生と協働し、SDGsをテーマとした映像制作に取り組んだ。

本研修は現地の学生との交流を通じて異文化理解を深めるとともに、映像制作の技術の共有やSDGs課題の探求を通じ、協働性や課題発見力などを養うことを目的とし

て行なった。

活動初日に映像のメインテーマを決めたのち、2日目にはアユタヤ、3日目には班ごとの自由散策を行い、様々な観光地を訪れた。現地の歴史的建造物や食文化、気候を直接肌で感じ、日本との違いを実感した。フィールドワーク中も、街中のいたるところにあるSDGsに関連する課題に着目して素材を撮影するなど、常に問題意識を持ちながら異文化に触れることができた。

映像制作の過程では、タイの学生と言語や映像スキルの差を埋める方法を模索しながら、各グループで編集作業を進めた。その中でSDGsに対する意識や捉え方の違いを実感すると同時に、言語の壁を越えて1つの作品を作り上げるための柔軟なコミュニケーション能力やお互いの強みを活かした役割の最適化を強く意識し、磨くことができた。

彼らとの交流を通じ、文化や言語、SDGsに対する認識の差異など多角的な視点から異文化理解を深められたことはもちろん、国を超え、現在も継続する交友関係を構築できたことは、今後の活動においても大きな財産になると確信している。

②福島研修

11月15～17日に行った福島県での活動では、被災地訪問と学習支援を行った。請戸小学校や浪江町周辺を訪れ、今も残る被害の状況や復興に向けた新たな取り組みなどを肌で感じ、学ぶことができた。初めて被災地を訪れる学生も多く、現地での体験

を通して震災の記憶や復興の現状について深く考える機会となった。

また、小学生の動画による海外交流の支援も行った。東日本大震災で被害を受けた四倉と、スマトラ島沖地震で被害を受けたインドネシア・アチェの小学生が、お互いを紹介する動画を作り合うことで異文化交流を行う活動を、動画編集などの面からサポートした。慣れない言語での挨拶など難しい点もあったが、小学生らしいエネルギーで楽しみながら動画制作に取り組むことができた。

加えて、今年度は新たにSDGsグループ活動を実施し、学生がいくつかの班に分かれてSDGsの17の目標の中からテーマを選び、福島の地域課題と関連付けながら映像制作に取り組んだ。現地での調査や話し合いを通して課題への理解を深め、SDGsの視点から地域社会について考える機会となった。

(2) メディアリテラシー教育

① 竜ヶ崎第一高校でのESD支援

この活動では実際に龍ヶ崎市を訪れ、地域資源の調査および教育支援活動を行った。まず、地域振興の核となっている「龍ヶ崎コロッケ」の調査では、実際に食することでその質の高さを確認した。コロッケは素材の食感が活かされ、メンチカツは非常にジューシーであり、食文化としての完成度の高さに感銘を受けた。また、この取り組みを町おこしとして牽引してきた商工会関係者から直接話を伺う機会を得たことは、地域活性化の実践プロセスを理解する上で極めて貴重な経験となった。一方で、これほど良質な資源がありながら全国的な認知度は依然として課題であり、今後は「龍ヶ崎といえばコロッケ」というブランドイメージを定着させるためのさらなる活動が必要

であると強く実感した。

次に、茨城県立竜ヶ崎第一高等学校において総合的な探究の時間の支援活動に従事した。生徒たちは、牛久沼、市街地の空洞化、多文化共生、交通、災害、デジタルといった多岐にわたる分野から自らの関心に基づきテーマを設定していた。各班が地域課題に対して独自の視点から調査・分析を行い、自ら問いを立てて仮説を構築していくプロセスは、まさに探究活動の本質を体現するものであった。特に前年度から継続してテーマに取り組んでいるグループにおいては、検証の深化や地域社会との連携の広がりが顕著であり、継続的な研究の重要性が示唆された。生徒一人ひとりが地域の当事者として真摯に課題に向き合う姿には、地域社会の未来を担う大きな可能性が感じられた。

今回の活動を通じて、地域を学びのフィールドとすることの意義を再認識するとともに、実地調査の重要性を痛感した。以前はオンライン媒体による代替可能性について疑問を抱いていたが、実際に現地を訪れ、現場のリアリティに触れることでしか得られない深い学びがあることを確信した。地域住民との直接的な対話は自身の視座を広げ、五感を用いた学びは座学以上の理解と記憶をもたらした。さらに、映像撮影技術のみならず、インタビュー能力や観察力、コミュニケーション能力といった実践的スキルを自然と習得できる点も、フィールドワークの大きな利点である。今後は本活動での気づきを活かし、様々な現場へ自ら積極的に赴くことで、知見のさらなる拡充を図っていきたい。

龍ヶ崎第一高等学校での学びは大きくわけて2つある。1つ目は、地域と生徒の協力。2つ目は、世代間を超えた交流だ。

まず1つ目の学びは、県をまたいで龍ヶ崎第一高等学校に訪問した目的の一つでもあると考えられる。この龍ヶ崎市では、地

域の人々と中学生、高校生たちが協力して街の活性化をしていた。印象的だったのは、本人たちの中で協力してあげているという意識が強くないことだ。生徒たちは楽しんでこの活動を行っている様子であった。自らが問題と向き合い、積極的な姿勢で活動を行っていた。何かをしてあげるではなく、何かをしたいという意識を強く感じた。

2つ目の学びは、地域の人々と生徒、という大きく世代を超えた交流に加えて中学生と高校生という、近いけれどなかなか関わりを持たない交流があったことだ。中高一貫校であってもなかなか中学生と高校生が同じグループになってなにかに取り組むということが少なくなっている中で、龍ヶ崎第一高等学校では学年関係なくテーマが同じグループでまとまることで、様々な意見を出すことができる取り組み方に工夫されていた。

②自主夜間中学校での支援活動

この活動は墨田区にある自主夜間中学校の墨田区えんぴつの会を訪問し、実際に学習者さんに対して授業を行なうことや、ドキュメンタリー制作をすることを目的として行なった。具体的には、中国人の学習者に対して日本語の授業や地震が起こった際の避難方法、文化、価値観などの日本で暮らす上での必要な知識の授業、日本人の学習者に対しては、学び直しの学習者が多く、国語や数学などの基礎的なものから、高齢になってから外国人ともコミュニケーションを取りたいという学習者には英語の授業も行なった。この自主夜間中学校での取り組みの興味深い点は、単なる学習の場としてだけでなく、地域コミュニティーの場として機能していた点だ。例えば、中国人の学習者をはじめ、多くの外国人の移住が地震の避難の仕方を学ぶことや、学習者同士で友達ができることなど、実際の生活に

近いところで学べる環境があることが、学習者を惹きつける理由であり、我々大学生が支援活動を行う意義であると感じた。また、昨年度の反省を活かし、学習者と教師の関係だけでなく、人と人との関係性構築を重視した。結果的に動画制作は叶わなかったが、より深い学びへつながるきっかけとなった。

3 結果・意義・所見

これらの活動を通して、異文化理解、地域貢献、メディアを活用した情報発信など、非常に多角的な学びを得ることができた。バンコク研修ではSDGsに関する動画の共同制作、発表によって異文化の理解を深めることができた。それだけではなく、その学びを地域貢献としてどのように学外へ広めるかという、新たな課題も見つかった。福島研修では、大学生として支援に関わることで、いわき市の小学生とインドネシア・アチェの小学生の異文化交流を促進することができた。また、テーマ別の動画制作、発表会では学生だけでなく、地域に住む方にも街の知らない側面を知る機会になったとお言葉をいただき、地域社会にも貢献することができた。龍ヶ崎第一高校と墨田区えんぴつの会では、学生・学習者と地域社会の結びつきをサポートすることで、社会課題解決や地域コミュニティー活性化の一端を担うことができた。

本活動の社会的な意義は、異文化理解や地域社会への関わりを通して、持続可能な社会の実現に貢献する力を育む点にある。SDGsの達成に向けては、世界各地の文化や地域が抱える課題を理解し、それに対して主体的に行動していく姿勢が求められている。本ゼミでの活動を通じて得た経験や知識は、そのような社会的課題に向き合うための基盤となり、今後の社会参加や活動に

においても重要な意味を持つと考えられる。

また、メディアを活用した情報発信の取り組みは、社会課題を広く共有し、人々の意識に働きかける有効な手段であることを実感した。映像や文章を用いて問題を発信することは、単なる情報提供にとどまらず、受け手の共感を生み出し、社会に対する関心や行動を促す力を持っている。

このように、今回の活動の経験は、メンバー一人ひとりの視野を広げるとともに、社会的な課題を自分自身の問題として捉える姿勢を養うことにつながった。さらに、社会の一員として責任を果たしていくための意識や実践的な力を身につけることができた点で、非常に意義のある学びの機会であったといえる。

観光回遊を生み出す地域マーケティング

—大三島みんなのワイナリーを起点としたドライブ観光マップ制作プロジェクト—

23M0818・松浦菜々香

1 連携した学外の個人・団体名

株式会社 大三島みんなのワイナリー
道の駅多々羅しまなみ公園

2 実施概要

(1) 連携の実現と経緯

1) 酒井ゼミでは毎年夏合宿において企業と連携し、企業が抱える課題の解決に取り組む実践型プロジェクトを実施している。2025年度の夏合宿に向けた企画検討にあたり、ゼミ内で議論を行い、「地域活性化をマーケティングの視点から実現すること」をテーマとして設定した。企業の選定にあたっては、地域と深く関わりながら事業を展開している企業との協働を目指し調査を行った。その中で、瀬戸内海に位置する愛媛県今治市大三島において、地域活性化を理念としてワイナリーを運営する株式会社大三島みんなのワイナリーの取り組みに着目した。地域の魅力発信や人とのつながりを重視する企業理念が本プロジェクトのテーマと関連性が高いと考え、連携を提案することとした。連携の提案は、プロジェクトリーダーである松浦菜々香（酒井ゼミ3年）が中心となり、2025年4月に株式会社大三島みんなのワイナリーへ電話で連絡を行った。電話では、酒井ゼミが企業や地域と連携しながらマーケティングの視点で課題解決に取り組む実践型ゼミであることを説明したうえで、企業の理念や取り組みに魅力を感じていることを伝え、「マーケティングの視点

から貴社の取り組みや大三島の魅力発信において支援できることがあれば、ぜひ協働させていただきたい」と提案した。その後、担当者との調整を経て、2025年4月24日に正式に連携が決定し、本プロジェクトが開始した。

(2) 事前調査および課題整理と施策方針の設定

①企業ヒアリングによる現状把握

連携決定後は、2025年5月以降、週1回程度の頻度でZoomによるミーティングを実施し、企業担当者へのヒアリングを通じて現状や課題の把握を進めた。ミーティングにはプロジェクトリーダー松浦を中心にゼミメンバーが参加し、ワイナリーの設立背景や事業内容、地域との関係性、現在の取り組みについて意見交換を行い、事業の目的や地域との関わりへの理解を深めた。

ヒアリングの結果、ワイナリーは人手不足の状況にあり、ワインの栽培・醸造・販売といった日常業務に多くの時間と人手を要しているため、島の活性化に向けた取り組みや広報活動に十分なリソースを割くことが難しいという課題が明らかとなった。そこで本プロジェクトでは、人手不足という条件を前提としながらも、限られたリソースの中で島の活性化に貢献できる施策を検討する方針を設定した。

②地域調査による観光構造の理解

また、施策検討にあたり大三島の歴史や観光の特徴、地域課題への理解を深めるため、大三島を長年調査してきた建築家・伊

東豊雄氏による講義を、恵比寿の伊東豊雄建築事務所にてメンバー全員で受講した。講義では大三島の歴史的背景や地域の変化、しまなみ海道整備以降の観光の特徴について学び、島の現状や地域課題への理解を深めた。その中で、人口減少や高齢化、地域事業の担い手不足といった課題に加え、しまなみ海道の発達によって観光客は増加しているものの、観光が通過型となり島内を回遊する行動が十分に生まれていないという課題に着目した。

③施策の方向性

前述のヒアリングおよび調査から、大三島では観光客数は増加しているものの、観光行動が短時間の立ち寄りにとどまる「通過型観光」の傾向が強く、島全体へ人の流れが十分に広がっていないという課題が明らかとなった。しまなみ海道の整備によりアクセスが向上したことで多くの観光客が島を訪れるようになった一方、滞在時間が短く、限られた場所のみを訪れて次の島へ移動してしまうケースも多い。その結果、島に存在する多様な観光資源や地域の魅力が十分に体験されないまま通過され、地域全体への波及効果が限定的になっている状況があると整理した。

また、ワイナリーへのヒアリングからは、人手不足により広報活動や地域活性化に向けた取り組みに十分なリソースを割くことが難しい現状も確認された。そのため、本プロジェクトでは多くの人員や継続的な運営負担を必要とする施策ではなく、限られたリソースでも実行可能で地域への波及効果が期待できる施策を検討する必要があると考えた。

以上の課題を踏まえ、本プロジェクトでは「島内の回遊性を高めること」を施策の方向性として設定した。大三島みんなのワイナリーを起点に、観光客が島内を巡りながら地域の魅力を体験できる仕組みを構築

することで、滞在時間の延長や地域への関心の向上につなげることを目指した。

大三島みんなのワイナリーのワインは、ぶどうの栽培から醸造、販売までの工程が島内で完結しており、地域の自然環境や資源と密接に結びついた産物である。また、ぶどう畑や醸造所などが島内に点在していることから、ワインづくりの工程そのものが島の中に広がっている特徴がある。こうした特徴を「島ワイン」という視点から可視化し、観光客が島内を巡るきっかけを生み出す施策として、大三島みんなのワイナリーの魅力と島内観光を結びつけた情報発信ツール「大三島観光ドライブマップ」を制作した。

さらに、ワイナリーの魅力やワインづくりの背景を伝えるため、造り手の想いや設立背景を発信するインタビュー動画を制作し、ドライブマップと連動させる施策も検討した。動画はQRコードから視聴できる形とし、観光客がワイナリーのストーリーに触れられる導線を設けることを想定した。

④設置場所の検討

観光ドライブマップの設置場所を検討するにあたり、大三島を訪れる観光客の動向を調査した。その結果、最も多くの観光客が集まる場所は道の駅多々羅しまなみ公園であることが分かった(注1)(以下、本報告書では「道の駅」と記載する)。同施設はしまなみ海道の主要な立ち寄り地点であり、サイクリストやドライブ観光客など多くの観光客が利用する拠点となっている。また近年は、しまなみ海道を利用したドライブ観光の需要が高まっており、車で訪れる観光客が多いことも確認された。そこで、観光客が立ち寄る可能性の高い道の駅にドライブマップを設置することで、島内回遊のきっかけを生み出せると考えた。

その後、道の駅の担当者へメールで本プロジェクトの背景と目的を説明し設置につ

いて相談した結果、協力を得ることができ、道の駅での設置に向けた連携が実現した。

(3) 合宿期間中の活動

2025年8月26日から28日までの合宿期間に向けて、観光ドライブマップのデザイン制作を進め、掲載スポットの選定やマップの構成、レイアウトなど、画像素材およびインタビュー動画を除く部分については事前に完成させた。また、合宿期間に向けて、ワイナリーの担当者ともミーティングを通じて内容の確認を行い、掲載情報や企画の方向性について事前に共有を行った。これにより、合宿期間中は現地でしか収集できない素材の撮影や取材に集中できる体制を整えた。

合宿期間中は、大三島みんなのワイナリーでのぶどう収穫の様子やワインづくりに関わる風景の撮影を行うとともに、造り手へのインタビュー動画の撮影を酒元陽朗人(酒井ゼミ3年)が実施した。また、本マップに掲載させていただく各スポットへ挨拶に伺い、マップへの掲載について説明を行うなど、地域との関係づくりにも取り組んだ。

これらの活動を通じて、観光ドライブマップに掲載する写真素材やインタビュー動画の撮影を完了し、合宿期間中に観光ドライブマップの制作を最終的に完成させた。



図1 制作した観光ドライブマップ
(「ワインと巡る、大三島ドライブマップ」)

3 結果・意義・初見

①結果

本プロジェクトでは、大三島観光ドライブマップを計1600部制作し、そのうち100部を大三島みんなのワイナリーに設置、1500部を道の駅多々羅しまなみ公園に設置した。マップは2025年9月より設置を開始し、配布状況については道の駅の担当者から定期的に残数の報告を受ける形で確認を行った。その結果、設置から1か月後には68部(残1432部)、3か月後には148部(残1352部)、5か月後には248部(残1252部)が配布されていることが確認された。当初は月250部程度の配布を目標としていたため、数値としては目標には到達しなかったものの、設置後も継続的に利用されていることが確認された。また、道の駅の担当者との連携により、マップは完売まで継続して設置していただけることとなり、現在も配布が続いている。

a) 施策の意義

本施策の意義は、観光客が最も多く集まる道の駅という拠点において、大三島みんなのワイナリーを起点とした島内回遊の情報を可視化した点にある。しまなみ海道を訪れる観光客は短時間の滞在にとどまりやすく、島全体の観光資源が十分に体験されないまま通過してしまうという課題があった。本マップでは、ワイナリー関連スポットやワインを提供する飲食店、島内の観光スポットを一体的に紹介することで、観光客が島内を巡るきっかけを生み出す情報ツールとしての役割を担うことを目指した。また、大三島みんなのワイナリーのワインは、ぶどうの栽培から醸造、販売までが島内で行われており、地域の自然環境や人々の営みと密接に結びついた産物である。本マップではこうしたワイナリーの取り組みを島内観光と結びつけて発信することで、

観光客に対してワイナリーが地域に根付いた産業であることを伝えるとともに、島の魅力や地域資源への理解を深める役割も持つと考えられる。

b) 所見

一方で、本プロジェクトを通じて改善すべき点も明らかとなった。本施策ではマップの制作および設置を中心とした情報発信を行ったが、設置後の発信や周知活動は十分とは言えなかった。例えば、SNS や観光施設での告知など、マップの存在を積極的に発信する取り組みを併用することで、よ

り多くの観光客に手に取ってもらえる可能性があったと考えられる。今後は設置型の情報発信に加えてオンラインでの発信や観光施設との連携を強化することで、より効果的に島内回遊を促進できる施策につながると考えられる。

注1. 愛知県庁公式ホームページ 令和5年観光客数と消費者数 より
(出所) 令和5年観光客数と消費者数を参考に筆者作成。

富山県の私立学校におけるキャリアサポートプログラム

—大学での研究意欲を高めるためのプログラム—

24M0121・灘野花菜子

1 連携した学外の個人・団体名

学校法人 荒井学園 高岡向陵高等学校

2 実施概要

(1) 企画実施の背景

富山県の私立高岡向陵高等学校（以下、向陵高校）は、以前からゼミの先輩方との交流があり、紹介を受けた高校である。今後、自分たちのキャリアを形成していくことや、他者のキャリア支援を行っていくうえで、富山県という東京近郊とは異なる環境で暮らす高校生たちとの関係を築き、地方におけるキャリア形成について理解を深めることは貴重な経験になると考えた。またそれと同時に、富山の高校生たちの視野を広げ、進路選択の手助けをしたいという思いから本企画を行うことを決めた。向陵高校の先生方からも交流を行うことへの許可を頂いたため、以前より交流を続けてきた先輩方から助言を頂きながら、高校生に対するキャリアサポートプログラムを企画・実施することとなった。

向陵高校とは昨年度もオンラインを含め複数回の交流会を実施している。先生方との事前の話し合いの中で、生徒たちは学校外の人との交流の機会が少なく、コミュニケーションスキルに課題があること、また大学進学後の生活について具体的なイメージが湧かず不安を感じている生徒も多いという現状をお聞きした。都市部では大学進学に関する情報が豊富であり、さまざまな

選択肢を知る機会が多い。一方で地方の高校では大学進学に関する具体的な情報が限られており、進学後の生活や学びについてリアルなイメージを持つことが難しいという課題がある。また、都市部の学生は大学生や研究者と交流する機会が比較的多いものに対し、地方の高校生はそのような環境に恵まれにくく、大学進学後の姿を具体的に想像しにくいという状況もある。

このような状況を踏まえ、本企画では高校生と大学生が直接交流し、大学生活や大学での学びについてリアルな話を聞く機会を設けることで、進路選択の幅を広げるとともに、自らの将来について主体的に考えるきっかけを提供することを目的としている。また、大学生からの提案に対して高校生が意見を出し合う双方向のグループディスカッションを取り入れることで、コミュニケーション能力の向上にもつなげたいと考えている。このような交流を通して、高校生が大学生活や将来の進路についてより明確なイメージを持ち、進学後のイメージを膨らませながら生徒たちの意識に変化をもたらすことを期待し、本企画を実施することとした。

(2) 事前準備

私たちは富山県の高校生との交流が距離の関係で回数の限られたものになることを見据えたうえで、オンラインも含め計3回の交流の一回一回をよりよい機会にする必要があると考えた。

本プロジェクトのメインである高校生と

の交流の時間をより多く確保するために、向陵高校の先生方との情報交換を積極的に行うことや、事前資料の作成や事前リハーサルを徹底的に行うことで当日の活動の最適化を図った。

(3) 実施期日

2025年10月15日(水) オンラインで打ち合わせ

2025年11月10日(月) オンラインで交流会

2025年12月15日(月) 対面

(4) 企画従事者

一条葵、上野優生、孫梓棟、富内溪音、灘野花菜子、細川南美、山下真穂、吉田真桜

計8名

(5) 企画内容

1 企画概要

本企画では、高校1年生の普通科未来アカデミアコース8名と未来クエストコース7名の計15名の生徒と交流し、今後の探究活動や継続的な交流を円滑に進めるために相互理解を深めることを目的とした活動を行った。今回の交流は、都内の大学生と地方の高校生との意見交換やコミュニケーションを主眼に置き、大学生の経験や大学生活について共有することで、高校生が将来の進路について考えるきっかけをつくることを目指した。そのため、一方的な説明ではなく対話を重視した形式で交流を行い、高校生が主体的に参加できる場を設けた。

2 自己理解を深めるためのワーク

事前の打ち合わせの中で、先生方から、生徒たちは学校外の人との交流の機会が少なくコミュニケーションスキルに課題があること、また大学進学後の生活について具

体的なイメージが湧かず不安を抱えている生徒がいるということを伺った。これから交流を行うにあたり、これから関わる私たち大学生について知ってもらうとともに、高校生と大学生が互いにコミュニケーションを取りながら交流できる機会を設けることが重要であると考えた。まず初めに、事前に準備したスライドを用いて、所属している大学や学部などの紹介を行った。また、大学生が一方的に話すだけの形式ではなく、自分たちの地元や好きなことなどについて語り合う時間を設けることで、高校生と大学生の双方がコミュニケーションを取れるように意識した。さらに、高校生の興味や関心について知ることで、今後の交流活動につなげていくことを目的とした。

課題としては、生徒が意見を発表したり、自分の考えを積極的に発言したりするための工夫が十分であったとは言えず、活動の中で意見を引き出すことに難しさがあった点が挙げられる。今後は、より発言しやすい雰囲気づくりや具体的な問かけの方法を工夫し、生徒が主体的に意見を出し合える活動を取り入れていく必要があると考えた。

3 自己理解を深めるためのワーク

今後の進路や将来について考えるきっかけをつくることを目的として、今回のプログラムでは高校生と大学生でグループを組み、自己理解を深めるためのワークを行った。具体的には、「楽しかったこと・得意なこと・苦手なこと」を挙げるワークと、「逆求人票」を作成するワークを実施した。これらの活動を通して、自分自身の経験や強みについて振り返りながら、自分の特徴を言語化する機会を設けた。

これらのワークを行った意義は大きく二つある。

一つ目は、自分自身を振り返ることで視

野を広げ、将来について考えるきっかけを得てもらう点である。高校1年生の段階で、自分が楽しいと感じることや得意なこと、苦手なことについて整理することで、自分自身の特徴や価値観に気づくことができる考えた。

二つ目は、グループでの共有を通して自信や主体性の向上につながる点である。自分の考えや経験を言葉にして他者に伝える経験を通して、自分自身の考えを整理するとともに、他者の考えを知る機会にもなると考えた。また、大学生や他の高校生からの意見を聞くことで、新たな気づきを得ることもつながると考えた。

まずワーク1では、「楽しかったこと・得意なこと・苦手なこと」をそれぞれ三つずつ挙げる活動を行った。ワークシートを用いて個人で考え、これまでの経験を振り返りながら自分の特徴について整理する時間を設けた。

続いてワーク2では、「逆求人票」を作成する活動を行った。これは企業が人材を募集する求人票とは逆に、自分の強みや特徴をもとにどのような職業が向いているのかを考える活動である。本ワークでは、ワーク1で記入した「楽しかったこと・得意なこと・苦手なこと」の内容を参考にしながら、ペアで互いの強みや特徴について話し合った。そのうえで、相手の経験や得意なことから、どのような職業や役割が向いているのかを客観的な視点から考え、互いに伝え合う活動を行った。

さらに、ワークの最後にはグループ内で発表を行い、互いの考えを共有する時間を設けた。活動後にはアンケートを実施し、ワークに対する印象や活動の効果についての質問を設けることで、今回の企画を振り返るとともに、今後の交流活動に活かしていくための取り組みとした。

3 結果・意義・所見

(1) 企画実施の背景

本活動の意義は、富山県の高校生に対して、大学生になってからの研究意欲を高めてもらおうことである。また、都内の大学生の私たちが富山県の高校生達と交流することによって、高校生の視野を広げることである。以下では、本企画を実施した結果と社会的意義、今後の活動に向けての振り返りについて詳しく述べていく。

(2) 交流で生まれた変化

交流を通して、高校生と大学生の間にくつつかの変化が見られた。交流の初めは、高校生の多くが緊張している様子であり、自分から発言することに消極的な姿も見られた。その中で、アイスブレイクやグループワークを通して徐々に会話が増え、活動の後半には自分の考えや経験を積極的に共有する様子が見られるようになった。また、「楽しかったこと・得意なこと・苦手なこと」を振り返るワークや逆求人票の作成を通して、自分の特徴や強みについて改めて考える機会となり、他者からの意見を聞くことで新たな気づきを得る姿も見られた。

今回の交流は、高校生が自分自身や将来について主体的に考える機会となるとともに、他者と意見を共有する経験を通してコミュニケーションへの抵抗感を和らげるきっかけになったといえる。また、私たち大学生にとっても高校生の考えや不安を知る貴重な機会となり、今後の交流活動やキャリア支援について考えるうえでの学びにつながった。

(3) 今後の活動について

今後も、オンライン形式を交えながら2～3ヶ月に一度ほどのペースで継続的に交流を行っていく予定である。オンライン上

で清水先生と話し合いを行い、生徒たちのニーズに応じた交流を行うことを意識し、向陵高校の生徒のみならず、大学生の視野

も広がるようなワークを企画し、今後の活動として展開していく。